

参加者

浅田、市ノ川、伊東、岡部、北島、古宇田、
小海、田中、鳥飼、中島(邦)、古川、畠田、
安田、山岡、山下、遊佐、吉本、
(以上17名はバイクでの参加者)
車での参加者、梅沢、横関兩夫妻、石川、
電車での参加者、秋元、

BMW RS Club

かわらばん

クラブ創立20周年記念一泊ツーリング特集号

Oct 2~3, '99

山岳道で遅い秋をめで、かつ
波音を楽しみつつ能登半島・
和倉温泉「加賀屋」への旅

かわらばん-中島邦雄 撒絵-小倉玲子

目の前に見事に広がるアルプスの峰々に出迎えられ、彼等の胸懷(むなところ)に包み込まれるような感じで、バイク17台と車2台が松本ICで高速を降りました。

通い慣れた麦草街道(R158)を進むと、松本電鉄のレールに沿ってサルビヤや秋桜が、あたかも行く秋を名残り惜しむかのように、何処までもどこまでも咲いていました。赤く色付いたリンゴが緑の葉の中に実を付け、辺りはまさに深まりゆく秋そのものの佇(たたず)まいでした。

やや曇り気味だった天気は、この頃から雲が切れて薄日が差し始め、梓川の清流を左手に見ながら稲核ダムを過ぎ、水のしたたり落ちる幾つもの隧道(ずいどう)を抜けると、去年のあの事故現場を通り過ぎ「お互に気をつけようね~」という無線が飛び交いました。そして奈川渡ダムの有る梓湖のほとりで、爽やかな風を受けながらの小休止。

気が狂いそうになる程の今年の夏の残暑の厳しさが、まるで昨夜の夢かと思われるくらいに、この日は空が高く爽やかに晴れ上がり、微風が冷んやりと流れています。先日の台風で折れて湖に流れ込んだ木々を、クレーンを使って湖から引き上げていましたが、まさに自然の猛威を目のあたりに見せられた思いがしました。

崖崩れで上高地への道の「釜トンネル」が崩落し、つい先日までは車も通れませんでしたが、この日は厳しい規制の元に、自家用以外の車両が次々とトンネルに吸い込まれてゆきました。それを見やりながら我々は安房トンネルに入り、かってのあの難所の安房峠を僅かに4~5分で通り抜けました。

トンネルを抜けると其処は緑の広がる平湯峠。急に気温が下がり夏の名残りのワレモコウが、僅かに赤黒い実を付けて咲き残っていました。標示板を見ると気温は12度で「うわ~寒いね~」とは久々に聞く言葉です。

右手に聳える山々の中に、一際高く空を突くように聳え立つ、茶色の山肌の「槍ヶ岳」の偉容を眺めつつ、一年前にも走った道を神岡へ向かって峠を下りました。去年の一泊旅行の際に泊まったレジボン・クラブが、我々の行く手の左側に見えましたが、あれからもう一年が経ったことになります。本当に月日の経つのは早いものです。

やがて左の方に奇麗な川が見え始め、土手には何処までもサルビヤが咲き、やがてその川が大きなダムへと川幅を広げてゆきました。幾つかのトンネルを抜け、その最後の入り口に「富山県」のサインが有りましたが、急に気温が上がってきました。「富山県」を抜け「石川県」の和倉へ向かいますが、まだ長い道中が待っています。

此処で「道の駅」を見つけて簡単に昼食となりました。外には「そば・うどん」の幟(のぼり)が出た小さな店も有って、カツ丼を作るのに一枚づつトンカツを揚げる丁寧さでした。ビールを飲む人、めん類を食べる人、そしてその後に名物の「鱈スシ」や「柿の葉スシ」で仕上げをしている人も居ました。だ~れだ? そう遊佐ちゃんです。

早めに宿に入ろうと休みもそこそこに出発しました。この暑さの中を七尾そして和倉までは、未だ一丁場あります。ここまでは何等のトラブルも無しに順調です(大きな声では言えませんが、実は諏訪湖SAから一人で先に飛び出してしまった町田さんが、一時行方不明で心配しましたが、無事に松本ICで会うことができました)。

富山の町に入ると急に気温が上がり始め、衣替えで黒いセーラー服を着た女学生が、何か場違いに見えて脱がしてやりたい気がしましたが、10月というのにナナント気温32度のサインです。平湯が12度でしたから、その気温差が実に20度。これではまともな思考力を維持することは不可能で、途中のスーパー・マーケットの前で休んだ時に、冷たいコーラでも飲むはずが、ウッカリしてビールを買ってしまいました。

暑さにあえぎながら高速には乗らずに市内を抜けすると、ヤット行く手にキラキラと日本海が見え始めました。生物の起源は海だそうですが、そのせいだからでもないでしょうが、海を見るとなにか心が落ちつくものです。

「氷見」方面のサインに沿ってなお進むと、右手にブリの定置網で名高い氷見の海が広がり始めました。波静かな海と磯の香りが我々を包み込み、その潮の香を胸一杯に吸い込むと、何とも言えずに幸せな気分にさせられました。何年か前に矢張りバイクでここを訪れた時に「小雪が舞いブリの上がる頃に、是非とももう一度ここに来なさいね、それは素晴らしいから」と盛んに勧めてくれた、あの時の親切な民宿のオバサンを思い出しました。

海を外れると素晴らしいワインディングの道に変わり、やがて目的地の和倉温泉に到着です。。たくさんのホテルが建ち並ぶ中に、一際見事な「加賀屋」が目の前に堂々と聳え立っていました。17台のバイクを立派な屋根のある駐車場に止め、余りキレイとは言えないスタイルで、豪華な館内へと足を踏み入れました。三時でした。

ロビーに座ると目の前に海が広がり、着物姿の女性が琴を奏で、何処かで香を焚いているのが分かりました。まさに雅(みやび)の世界です。

更にガラス張りのエレベーターに乗ると、吹き抜けの一方の壁を加賀友禅が上から下まで見事に彩り、その華麗さにはただ驚かさればかりでした。

三間からなる大きな部屋は海に面し、日が暮れるとホテルの灯が海面に反射してキラキラと輝いて見え、とてもメルヘンチックです。



三つ有る風呂も全てが海に面して、露天プロに入ると微かに海の香が漂ってきました。湯船の湯は、

幾らか塩氣を帯びていて、昼間の余りの暑さでアセモが出来た身体に、と

も心地良く感じられました。

風呂に入る前に持込んだ、

「越の寒梅」を既に

4~5人で一升空にし、

冷蔵庫のビールにもが手つい

ているだけに、風呂の中でお燐

がついたようで、良い気持ちになってしましました。そしてさあ~宴会の始まりです。